

奈良朝日本語のオ列甲類乙類音節について

——奄美大島方言祖語に見る痕跡——

浦 上 準 之 助

**The “Ko-ruī/Otsu-ruī ” Distinction of Old Japanese “O-dan”
Syllables and its Vestage in Proto-Amami**

Junnosuke Urakami

Summary

The writer of present paper carried out field work research in what he calls “Kita RyuKyu (North Ryukyu)” islands in 1985 and 1986. He later intended to reconstruct, from the data collected in seven dialects of Amami Oshima islands, a language called “Proto-Amami (PA).” The purpose of reconstructing this proto-language was to find out potential evidence which could shed light on one of the most putative phonological problems of Old Japanese (OJ). The problem is what has been known as the orthographic distinction of “Ko-ruī” and “Otsu-ruī” syllables present in written records of Old Japanese.

The present article discusses first some technical problems found in past approaches to OJ phonology, and then proposes to set up a new syllabary chart of Old Japanese, having pointed out pros and cons of the one traditionally adopted by past Japanese linguists.

Finally it will formulate sound correspondences of OJ and PA.

Due to limitation in time and length of the present paper, however, the writer confines his arguments to the matter regarding the “Ko-ruī/Otsu-ruī” distinction of OJ “O-dan” syllables (the OJ syllables that may have a vowel /o/).

Received Apr. 30, 1993

符号および略記号

C (any consonant) 子音

C? 声門化した子音

Co₁ 古代日本語のオ列甲類音節Co₂ 古代日本語のオ列乙類音節

Co 古代日本語のオ列音節で甲乙の書き分けの無いもの

(注：頭子音を持たないと思われるア行音節については、本稿では“ゼロ頭子音， \emptyset ”を設けた。この場合，例えば音節の「お」は“ $\emptyset o$ ”と表記し，音節型としては，Coに準ずることになる。)

Sib (Shiba dialect) (奄美大島の) 芝方言

Sho (Shodon dialect) (同上) 諸鈍方言

Ong (Ongachi dialect) (同上) 恩勝方言

Nas (Nase dialect) (同上) 名瀬方言

Yen (Yen dialect) (同上) 円方言

Yoa (Yoan dialect) (同上) 用安方言

San (Sani dialect) (同上) 佐仁方言

／／音素表記

[] 音声表記

⊥ 再建不可な音素 (ただし，巻末の「参考資料1」では，これを空白部の下線にて示す)

／ 右項の音韻環境で

> 右項の言語形式に変化した

< 右項の言語形式に由来する

語 (或いは形態素) 境界線

～ 左項と右項が互いに同一語 (或いは音) の変異形式である

<L> 借用語

<L?> 被調査者が借用の可能性を示唆した語

id (identical gloss) 同一の語義

IRC (irrecoverable) 再建の不可な語

INV (invalid) 資料が不十分にて再建を行わない語

0. はじめに

著者は，1985年から翌年の1986年にかけて三度北琉球列島に渡り，沖縄本島を手初めに列島最北端に位置する奄美大島までに点在する全20数地点において言語調査を実施した。この

調査は、当時手掛けていた学位論文の一環として行ったものである。その動機は、以前から関心を抱いていた奈良朝の日本語（以下、「古代日本語」（「古日」と略す場合あり）、及び「上代日本語」という用語を用いる場合がある。）に見られる、ある音韻上の問題点を考察する手掛かりを、北琉球方言に発掘できるのではないかという期待であった。その問題点とは、国語音韻史上「上代特殊仮名遣い」として知られる、いわゆる“甲類”，“乙類”音節の書き分けである。従って、言語調査のための語彙項目のリストも、一般的にいうそれとは、ずいぶん見た目の異なるものとなった。限られた語彙数の範囲で、できるだけ多くの甲類乙類音節を含ませようと意図した結果である。音素表記を終えた資料を用いて、最終的には、“北琉球祖語”を再構する予定であった¹。しかし、その後学位論文として個人で処理するには、その資料が余りにも多くなり過ぎたというプラクティカルな事情により、最終的にはデータを奄美大島に点在する七方言に絞り、“奄美祖語”の再建を目指すことにした。

この奄美祖語の再建に用いた方言資料と再建の過程、および再建された祖語の261語は、すべて拙論、Urakami 1992a, と 1992b に収めてある²。読者の便宜を計り、Urakami 1992b より奄祖（PA）と古日（OJ）の261項目を抜き出し、本稿の末尾に「参考資料1」として掲載する。本稿でこれらの資料を引用する場合は、すべてオリジナル資料の項目番号をそのまま付すことにする。本稿で引用する方言や奄美祖語の語は、特に断らない限り音素表記によるものである。古代日本語に関しては、万葉仮名で書かれたものをローマ字に転写して表記するのが、従来ひとつのやり方である。ただし、次章にも述べるように、この様なローマ字表記には音声記号や音素記号との境界線を不明瞭にさせてしまうような問題点が認められるものがあるので、本稿ではこれまで研究史上採用されたものから適格なものを選んで用いることにする。

さて、最後に本論文の目的について触れておきたい。

先に記した様に、北琉球での言語調査およびその後の祖語の再建作業の目的は、上代日本語における甲類乙類音節の書き分けに対する痕跡の模索にあった。この目的がそのまま本稿の目的である。紙面の都合上、今回は甲類乙類の書き分けのある音節の中でも、特にオ列のものについてのみ検証を試みる³。

1. 甲類音節と乙類音節の書き分けと表記上の問題点について

奈良時代の日本語に、平安期以降消失してしまった音節の書き分けがあったことは、国内での国語学の分野だけではなく、国の内外の歴史言語学においてもよく知られた事実である⁴。この対立は、いわゆる五十音図を基盤に見てみると、イ例、エ例、そしてオ例の音節の一部に認められるものである。

この現象は、石塚龍麿によって研究され、その成果は、著書『假名遣奥山路』に記されている⁵。しかし、これを初めて体系的に捕え、音声学的、音韻論的な説明を試みたのは、橋本

進吉であった。橋本進吉著作集第六冊の『國語音韻史』第七章「奈良朝及びそれ以前の國語の音聲」に、次の様な記述が見える。

第二に、その外にこの内の十三の種類は普通假名で書き分けぬ種類の區別があるのである。即ち㊦㊧㊨㊩㊪㊫㊬㊭㊮㊯㊰㊱㊲㊳なり。これらの假名は片假名、平假名では一種なれど、奈良期のものを調べると二類に分れてゐる。萬葉假名も各々二類に分れてみて、それを用ゐる言葉も二類に分かれ、一方の類に属する言葉では一方の類の假名を用ゐ、他の類に属する言葉では他の類の假名を用ゐる。この間混同すること極めて稀である。具體的な例を示すに、㊦に於けるものの甲類に属するものは祢、鷄、稽、計、啓、谿、家、賈(以上清音)。寔、牙、下(以上濁音)及び訓を用ゐたものに、異があり。これは一類として相通ずる。乙類は氣、開、該、概、慨、階、戒、既(以上清音)。宜、愷、礙、曄、碍、義、偈(以上濁音)。食、毛、消(以上訓)が一類となる。(介は尙疑問として残る。この外「來利」や「す竹」云々の如き場合は出さず。)而して甲類は加行四段の命令形の㊦、加行四段の助動詞「り」につづく形。例、咲㊦り、行㊦れば等。形容詞の語尾の㊦。例、遠㊦ども、無㊦ば、うら戀し㊦む等。助動詞のけり、けむの㊦。單語に於ては、建^{たけ}る、猛^{たけ}ぶ、叫^{きけ}ぶ、今^け日、鷄^け、異^けし。乙類は加行四段の動詞の已然形、咲㊦ば、行㊦ども等。下二段の將然形、連用形、懸㊦む、懸㊦し、告㊦やらん、助㊦にこね、及び下二段の命令形及び㊦といふ音から變じた㊦。例、平㊦し、さや㊦し等。單語としては箭、食(例、餉などに於ける)、池、影、酒、菅、竹、髻、毛、蓋し、翔る、歎く、茂く等。

伝統的な假名五十音図の配列に従って、これら甲乙の音節は、早い時期一部の学者に下の[表1]の様を示されてきた。

[表1] 奈良朝日本語の音節——研究史初期の表記によるもの

ϕa	ka	ga	sa	za	ta	da	na	pa	ba	ma	ja	ra	wa
ϕi	ki	gi	si	zi	ti	di	ni	pi	bi	mi	-	ri	wi
	kī	gī						pī	bī	mī			
ϕu	ku	gu	su	zu	tu	du	nu	pu	bu	mu	ju	ru	-
ϕe	ke	ge	se	ze	te	de	ne	pe	be	me	je	re	we
	kē	gē						pē	bē	mē			
ϕo	ko	go	so	zo	to	do	no	po	bo	mo	jo	ro	wo
	kō	gō	sō	zō	tō	dō	nō			(mō)	jō	rō	

この表の中で、kiとkī、keとkē、koとkōなどが、甲類、乙類のペアで、ウムラウト記号を付した母音部を持つ音節が乙類、それに対して無票の母音部をもつものが甲類の音節である。これに対して、甲類乙類の書き分けを持たない音節がある事にも注意されたい。ア列、ウ列の全ての音節、及び、イ列、エ列の多くのもの、そして、オ列音節の一部のものなどは、この種の区別が無い。また、見方を少し変えれば、ア行とワ行の音節には見られない書き分けである。

橋本進吉以来、有坂秀世や大野晋らの著名な研究者を通じて試みられてきた、中国語の漢字原音から音価を推定するやり方は、本稿の目的とするところではないが、これら諸学者が

どの様な結論を提起してきたか概略眺めてみることにする。ここに見る推定が、全て母音の音価に焦点を合わせたものであることは、研究史の当初より、甲類、乙類の音節の書き分けを音節核母音の音価的差異によるものであるとした学者達の態度をよく表して興味がある。極端な例を挙げると、大野1974及び1982などは、下に示した様な八母音体系を再構し、これらには各方面からの強い反駁があった。言語類型論的に見ても、この様な母音体系の存在は考え難い⁸。

大野モデル

i	ï	u			
e	ë	ö	o		
	a				

i=甲類イ o=甲類オ
ï=乙類イ ö=乙類オ
e=甲類エ
ë=乙類エ

このアプローチで先駆的研究であった橋本1950と、有坂1957に打ち出されたモデルをここに併せて紹介しておく⁹。

橋本モデル

有坂モデル

i ₁ *[i]	e ₁ *[e]	o ₁ *[o]		i ₁ *[i]	e ₁ *[e]	o ₁ *[o]
i ₂ *[ï i]	e ₂ *[ë e]	o ₂ *[ö ö]		i ₂ *[ï i]	e ₂ *[əi]	o ₂ *[ö]
					~*[əe]	

先に指摘してそのままにしておいた件について、ここで少し触れておく。

上の〔表1〕で見た、甲乙各音節タイプを書き分けるための表記をもう一度眺めていただきたい。まず、乙類の音節に用いられたウムラウトを持った母音(ïやëなど)であるが、これは、本来、音声学で中舌化された母音を表すための音声記号である。つまり、音声記号表に有るものを仮名表記されたもののローマ字転写に用いた訳である。問題が、殊に深く音声学上の解釈に関わることであるから、誤解が有れば致命的なものである。乙類の音節に音声学的根拠が弱いままにウムラウトが使われた場合、「乙類=中舌母音を擁する音節」と言う先入観によって深刻な誤解が誘発され得ることは想像に難くない。この事は、特に上に見た大野モデルの母音体系によく現われている。

共起しうる第二の先入観は、甲類のものは常に無票(つまりウムラウトがない)であるから、同じく無票である甲乙の区別を持たない音節は、甲類のそれと同じ体質の母音を持つものであろうと言う事である。甲乙の区別を持たない音節の甲乙ステータスも、やはり慎重かつ体系的な検証をもってのみ決定しうることであるから、これらの音節に暫定的に中立的なプレゼンテーションを与えなかったのは、研究史の流れにおいて不幸な出来事であった。

これらのような事情を踏まえて、拙論1992a, 1992bでは、表記上の書き分けを示す場合はウムラウトを廃し、早くから松本、服部両博士らが行った様に、数字の“1”と“2”を用いてある。

甲類音節には、“₁”を、そして乙類音節には“₂”を付してある。例えば、甲類の「こ」は、“ko₁”，乙類の「こ」は、“ko₂”という表記によって示す。甲乙の書き分けの無いものは、無票とする。また、“₁”と“₂”の数字は、音節全体に付すものであって、特に子音あるいは母音だけに与えられたものではないことを強調しておく。

以上の事を確認した上で、本稿も既に見た [表1] を下の [表2] の様に改め、今後これらの表記法に従って論を進めたい。

[表2] 奈良朝日本語の音節——改訂版

∅a	ka	ga	sa	za	ta	da	na	pa	ba	ma	ja	ra	wa
∅i	ki ₁	gi ₁	si	zi	ti	di	ni	pi ₁	bi ₁	mi ₁	-	ri	wi
	ki ₂	gi ₂						pi ₂	bi ₂	mi ₂			
∅u	ku	gu	sz	zu	tu	du	nu	pu	bu	mu	ju	ru	-
∅e	ke ₁	ge ₁	se	ze	te	de	ne	pe ₁	be ₁	me ₁	je	re	we
	ke ₂	ge ₂						pe ₂	be ₂	me ₂			
∅o	ko ₁	go ₁	so ₁	zo ₁	to ₁	do ₁	no ₁	po ₁	bo ₁	mo	jo ₁	ro ₁	wo
	ko ₂	go ₂	so ₂	zo ₂	to ₂	do ₂	no ₂			(mo ₁)	jo ₂	ro ₂	
										(mo ₂)			

2. 古代日本語と奄美祖語の概観的対照と比較

奄美祖語の再構は、前述した拙論二点を参照していただかなければならないが、その成果を基にここに古日と奄祖の総体的な音韻対照と比較データを提示しておく。

前章で示唆したが、音価的に正体不明の言語形式にローマ字表記を与える際は細心の注意が必要である。特に、古代日本語の様に現代日本語との音韻対応を基盤にして、子音表記部と母音表記部をもってプレゼンテーションを行う場合、それなりの危険が伴う。ただし、我々は考察用の素材として何等かの方法をもってその諸音節を提示しなければならないという現実に直面する訳であるから、実際には、やはり平安朝以降の日本語との対応を参考にして、音節の「こ」や「せ」は、それぞれ“ko”や“se”の様に表記するのが妥当であると思われる。大切なのは、この場合、“k—”や“s—”が音価上必ずしも純粋な意味の子音を示している訳でもなく、また同時に“—o”や“—e”が純粋な母音音価を示唆するものでもないことにコンセンサスを得ておくことである。過去の研究において、例えばke₁とke₂には、*[ke]と*[k_ie]の様な推定があったし、また、*[k_ie]と*[ke]の様な推定も行われた¹⁰。前者では、甲乙の区別が乙類の「け」の頭子音と核母音との間に横たわる介音の様なものにあると見ることができし、惑いは、その介音を乙類の核母音“e₂”の一部と見ることも可能である。また、後

者では、それが甲類の子音“k₁”のパラタルな素性と乙類の子音“k₂”の非パラタルな素性によるものであると定義することもできる¹¹。この様に、子音か母音かという点では、これ程異なる解釈が存在し得るのに、上に挙げた二種類の推定は、実は甲乙の [け] の区別に対して全く同一の示差エレメントを暗示していることに気付いていただきたい。前者の推定に見る乙類の介音（惑いは、母音の一部）* [—i̇—] は、後者の推定の乙類子音の非パラタルな性質（ここでは無票である）を示す、別のやり方である。

この様に、音韻論的であれ音声学的であれ、言語音の解釈には様々な観点が導入され、一様でない場合がある。一番大切なのは、それを見る者のフレキシブルな態度にあると言えよう。

以上のような点に注意しながら、下の各表を御覧いただきたい。[表3]は、古代日本語の子音表記部と奄美祖語の子音、そして同じく古日の母音表記部と奄祖の母音の対照表である。それに対し [表4] は、これと同一の考えに立った対応表である。両表の中で、甲乙の類別は母音部に示してあるが、これは一覽表を提示するための便宜に過ぎない。あくまで、甲乙の示差要素を母音表記部に仮定的に含めておくと言う暫定措置であることに留意されたい¹²。

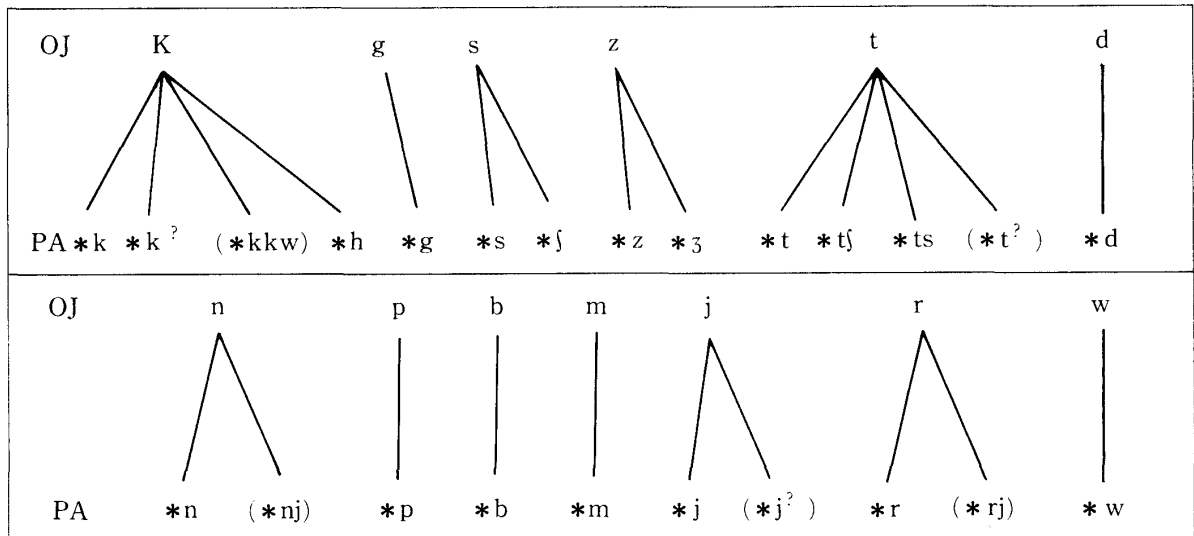
[表3] 古代日本語と奄美祖語の音韻体系対照表

子音									
OJ(古日)					PA(奄祖)				
p	t	k			*p	*t	*k		(*kkw)
b	d	g			*b	*d	*g		
						(*t ²)	*k ²		
					*ts		*tʃ		
	s	j	w		*s	*ʃ	*j	*w	
							(*j ²)	*h	
	z				*z	*ʒ			
	r				*r		(*rj)		
m	n				*m	*n	(*nj)		

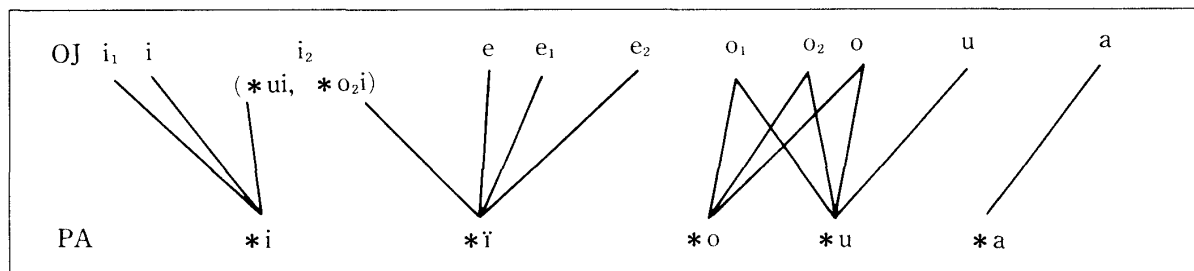
母音								
OJ	i ₁	i ₂	e ₁	e ₂	a	o ₁	o ₂	u
PA	*i		*i̇		*a	*o	*u	

[表4] 古代日本語と奄見祖語の概観的音韻対応表

子音



母音



3. 才段音節の対応

当章では、古代日本語の Co₁ 音節と Co₂ 音節が、それぞれ奄美祖語のいかなる音節（或いは音）と対応を見せるか観察を行うことにする。

考察する音節は、すべてそれを含む語形の中で下線を施すことによって提示する。

各テーブルに与えられた数記号について、“0 1”は古日 Co₁ にかかわるもの、また“0 2”と“0 3”は、それぞれ Co₂とCo₃にかかわるものである。後続する“A”と“B”は、それぞれ対応する奄美祖語の音節の種類の違いを示す。“X”は、対応が例外的であることを示す。

Table 01A 古日 Co₁と奄祖*Co₁が対応するケース

(72) ato ₁	:: *ato	(73) mi ₁ nato ₁	:: *minjato
~ato ₂			
(74) jado ₁	:: *jado ₁	(76) kado ₁	:: *kado

奈良朝日本語のオ列甲類乙類音節について

(77) <u>tuno</u> ₁	:: * <u>tsino</u>	(78) <u>mo</u> ₁ <u>mo</u> ₁	:: * <u>momo</u>
(80) <u>so</u> ₁	:: * <u>so</u>	(82) <u>iso</u> ₁	:: * <u>ijo</u>
(150) <u>suso</u> ₁	:: * <u>s—so</u>		

Table 01B 古日 Co₁と奄祖 *Cu が対応するケース

(21) <u>siro</u> ₁	:: * <u>irju</u>	(67) <u>ko</u> ₁ <u>gatana</u>	:: * <u>kugatana</u>
(68) <u>ko</u> ₁ <u>mura</u>	:: * <u>kubura</u>	(83) <u>jo</u> ₁ <u>wa</u>	:: * <u>juwa</u>
(84) <u>jo</u> ₁ <u>naka</u>	:: * <u>junaha</u>	(85) <u>majo</u> ₁	:: * <u>maju</u>
(138) <u>ko</u> ₁	:: * <u>ku</u>	(140) <u>ko</u> ₁	:: * <u>—ku—</u>
(141) <u>ko</u> ₁ <u>su</u>	:: * <u>ku—</u>	(143) <u>pako</u> ₁	:: * <u>pakku</u>
(146) <u>to</u> ₁ <u>zi</u>	:: * <u>tu³zi</u>	(147) <u>to</u> ₁ <u>gu</u>	:: * <u>tug—</u>
(148) <u>kuro</u> ₁	:: * <u>k²uru</u>	(152) <u>jo</u> ₁ <u>ru</u>	:: * <u>juru</u>

Table 01X 古日 Co₁と奄祖の例外的対応

(66) <u>ko</u> ₁	:: * <u>kkwa</u>
-----------------------------	------------------

Table 02A 古日 Co₂と奄祖 *Cu が対応するケース

(4) <u>ko</u> ₂ <u>si</u>	:: * <u>ku³si</u>	(7) <u>to</u> ₂ <u>ki</u>	:: * <u>tuki</u>
(8) <u>to</u> ₂ <u>si</u>	:: * <u>tusi</u>	(9) <u>to</u> ₂ <u>ri</u>	:: * <u>turi</u>
(10) <u>pi</u> ₁ <u>to</u> ₂	:: * <u>t³ju</u>	(12) <u>wopi</u> ₁ <u>to</u> ₂	:: * <u>wutu</u>
(14) <u>pi</u> ₁ <u>to</u> ₂ <u>pi</u>	:: * <u>t³jui</u>	(15) <u>pi</u> ₁ <u>to</u> ₂ <u>to</u> ₂ <u>se</u>	:: * <u>t³utusi</u>
(17) <u>wodo</u> ₂ <u>ri</u>	:: * <u>wduri</u>	(18) <u>no</u> ₂ <u>ri</u>	:: * <u>nuri</u>
(19) <u>no</u> ₂ <u>ri</u>	:: * <u>nuri</u>	(23) <u>no</u> ₂ <u>mi</u> ₂	:: * <u>numi</u>
(43) <u>ko</u> ₂ <u>me</u> ₂	:: * <u>kum³i</u>	(87) <u>ko</u> ₂ <u>to</u> ₂ <u>si</u>	:: * <u>kutu³si</u>
(88) <u>ko</u> ₂ <u>no</u> ₂	:: * <u>kun</u>	(89) <u>ko</u> ₂ <u>no</u> ₂ <u>jo</u> ₂	:: * <u>kun · ju</u>
(90) <u>ko</u> ₂ <u>re</u>	:: * <u>kur³i</u>	(91) <u>ko</u> ₂ <u>gu</u>	:: * <u>kug—</u>
(92) <u>ko</u> ₂ <u>zo</u> ₂	:: * <u>kuzu</u>	(95) <u>ko</u> ₂ <u>to</u> ₂ <u>ba</u>	:: * <u>kutuba</u>
(99) <u>ko</u> ₂ <u>re</u>	:: * <u>—guri</u>	(100) <u>ko</u> ₂ <u>ro</u> ₂ <u>su</u>	:: * <u>kut³u—</u>
(101) <u>ko</u> ₂ <u>we</u>	:: * <u>kui</u>	(102) <u>jo</u> ₂ <u>ro</u> ₂ <u>ko</u> ₂ <u>bu</u>	:: * <u>juruku—</u>
(106) <u>nago</u> ₂ <u>ri</u>	:: * <u>naguri</u>	(107) <u>to</u> ₂	:: * <u>tu</u>
(108) <u>to</u> ₂ <u>bu</u>	:: * <u>tub—</u>	(110) <u>to</u> ₂ <u>po</u>	:: * <u>tuu</u>
(111) <u>to</u> ₂ <u>pori</u>	:: * <u>tuuri</u>	(112) <u>to</u> ₂ <u>mu</u>	:: * <u>tum³i</u>
(113) <u>to</u> ₂ <u>mo</u> ₂ <u>gara</u>	:: * <u>tungara</u>	(114) <u>oto</u> ₂ <u>pi</u> ₁ <u>to</u> ₂	:: * <u>ututu</u>

(115) ϕ oto ₂ su	:: * <u>utu</u> —	(116) ϕ oto ₂	:: * <u>utu</u>
(117) mo ₂ to ₂	:: * <u>mutu</u>	(118) jo ₂ do ₂ mi ₁	:: * <u>judumi</u>
(123) no ₂ mu	:: * <u>num</u> —	(125) mo ₂ tu	:: * <u>mut</u> —
(126) mo ₂ no ₂	:: * <u>mun</u>		
(127) mo ₂ no ₂ gatari	:: * <u>mungatar</u> —		
(128) pi ₁ ro ₂	:: * <u>pirju</u>	(129) ϕ oro ₂ su	:: * <u>uru</u> —
(132) jo ₂	:: * <u>ju</u>	(133) jo ₂ su	:: * <u>jus</u> —
(134) jo ₂ ru	:: * <u>jur</u> —	(135) jo ₂ mu	:: * <u>jum</u> —
(136) jo ₂ tu	:: * <u>juutsi</u>	(161) no ₂ go ₂ pu	:: * <u>nug</u> —
(162) to ₂ ga	:: * <u>tuga</u>	(169) tamoto ₂	:: * <u>tam</u> — <u>tu</u>
(225) to ₂ woka	:: * <u>tuuka</u>	(228) ϕ o ϕ ipi ₁ to ₂	:: * <u>ut<u>u</u></u>

Table 02B 古日 Co₂ と奄祖 *Co が対応するケース

(22) mi ₁ no ₂	:: * <u>minjo</u>	(131) ϕ oso ₂	:: * <u>oso</u>
(155) ko ₂ ko ₂ ro ₂	:: * <u>kokoro</u>	(160) no ₂ ko ₂ ru	:: * <u>nokor</u> —
(164) to ₂ mo ₂	:: * <u>tomo</u>	(165) to ₂ ko ₂ ro ₂	:: * <u>tokoro</u>
(166) to ₂ no ₂	:: * <u>tono</u>	(167) to ₂ mo ₂	:: * <u>tomo</u>
(171) no ₂	:: * <u>no</u>		

Table 02X 古日 Co₂ と奄祖の例外的対応

(その一)	(13) pi ₁ to ₂	:: * <u>t²ii</u> —
	(130) so ₂ mu	:: * <u>simi</u>
	(157) ko ₂ no ₂ pa	:: * <u>kimpa</u>
(その二)	(88) ko ₂ no ₂	:: * <u>kun</u>
	(89) ko ₂ no ₂ jo ₂	:: * <u>kun</u> ・ju
	(113) to ₂ mo ₂ gara	:: * <u>tungara</u>
	(126) mo ₂ no ₂	:: * <u>mun</u>
	(127) mo ₂ no ₂ gatari	:: * <u>mungatar</u> —
	(241) wono ₂	:: * <u>wun</u>

Table 03A 古日 Co と奄祖 *Cu が対応するケース

(12) wopi ₁ to ₂	:: * <u>wutu</u>	(17) wodo ₂ ri	:: * <u>wuduri</u>
(31) wogi ₁	:: * <u>wugi</u>	(56) woke ₂	:: * <u>wuhë</u>

(110) to ₂ po	:: * tuu—	(111) to ₂ pori	:: * tuuri
(114) ϕ oto ₂ pi ₁ to ₂	:: * ututu	(115) ϕ oto ₂ su	:: * utu{—
(116) ϕ oto ₂	:: * utu	(129) ϕ oro ₂ su	:: * uru —
(178) wopi ₂	:: * wui	(183) ϕ oki ₁	:: * ukki
(193) ϕ obi ₁	:: * ubi	(201) wo(mi ₁ na)	:: * wu(nagu)
(214) ϕ oja	:: * uja	(215) ϕ orabi ₁	:: * urab —
(216) poka	:: * puka	(225) to ₂ woka	:: * tuuka
(226) mamori	:: * maburi	(228) ϕ o ϕ ipi ₁ to	:: * ut{u
(241) wono	:: * wun	(242) wori	:: * wu — (—)
(243) ϕ owo	:: * j [?] u		
~iwo			

Table 03B 古日 Co と奄祖 *Co が対応するケース

(131) ϕ oso ₂	:: * oso	(149) ϕ omosiro	:: * omosiro
(164) to ₂ mo	:: * tomo	(220) ϕ amori	:: * amor —
(221) ϕ awo	:: * oo	(222) kapo	:: * kao
(224) sawo	:: * so		

Table 03X 古日 Co と奄祖の例外的対応

(230) ϕ omo	:: * amma
(244) to ₂ wo	:: * tu —

上の各テーブルが示す様に、わずかな例外を除いては古代日本語と奄美祖語は、概略次のような音韻対応を見せる。「古日 Co₁ は、語末の位置において奄祖の *Co と対応する。古日 Co₂ も、奄祖の *Co に対応する。しかしこれは奄祖の該当する語が * (C) oCo という形式で存在する場合に限られている。古日が、—apo— と —awo— という形を持っている場合は、対応する子音が奄祖には不在となり、古日の -Co- が奄祖の -oo- に対応する。

奄祖の *Cu は、古日の語末の Co₁ 以外のケースに対応を見せる。つまり、*Cu は、古日の Co₂, Co, そして非語末位置での Co₁ に対応する。」

4. 音韻規則の確立と例外

前章での検証を基にして、ここに古代日本語 Co₁, Co₂ 音節と奄美祖語の音韻規則を下のように確立する。

規則番号	OJ	PA
1.	—Co ₁ #	:: *—Co#
2.	Co ₂	:: *Co (PAの*(C)oCoにおいて)
3.	Co	:: *Co ([規則3] および OJ- <i>apo-</i> などの環境で)
4.	Co ₁ , Co ₂ , Co	:: *Cu ([規則1, 2, 3] の環境以外で)

上記の「規則1」であるが、語末にのみ認められるこの規則は、[Table 01A]に見るよ
うに9項目の例証がある。これに対して、[Table 01B]に示される14項目のうち、語末に関
わるもの6項目が例外となる。[Table 01B]は、語内での位置を考慮せず、単に古日 Co₁
と奄祖 *Cuが対応するものを取りまとめた表であることに留意されたい。

6項目の例外は次の通りである。

(21) <u>siro</u> ₁	::	* <u>si</u> ru
(85) <u>majo</u> ₁	::	* <u>ma</u> ju
(138) <u>ko</u> ₁	::	* <u>ku</u>
(140) <u>ko</u> ₁	::	*— <u>kk</u> u
(143) <u>pako</u> ₁	::	* <u>pa</u> ku
(148) <u>kuro</u> ₁	::	* <u>k</u> ² uru

これら6項目の例外については、例外となったことに対する通時的な根拠が見当たること
が多い¹³。

PA*(C)oCoという一定の語形に見られる「規則2」は、[Table 02B]に7例がある。
例外は無い。

「規則3」は、PAの*(C)oCo, OJの—*awo*—と—*apo*—と—*amo*—という語形を持つ
6項目による例証がある。[Table 03B]を参照されたい。例外は無い。

次に、「規則4」に対する例外であるが、非語末位置のCo₁に関するものに対しては、(78)
OJ mo₁mo₁ :: PA*momo の一例が例外として確認される ([Table 01A] 参照)。とこ
ろで、奄美祖語には、*CuCuか*CoCoは認められるが、*CuCoや*CoCuの形式は見ら
れないと言う特徴がある。これは、奄美祖語では、この様な語型においては、母音の*uと
*oが同一語内に共存しないという一種の母音調和現象が存在することを示すものであろ
う。奈良朝日本語でも、Co₁とCo₂が同一語内で共立しない特徴があるが、この特徴と類似
する点で興味のある現象である。この母音調和の観点から眺めてみると、(78)のケースが例
外となった経緯が見えてくる。まず、PAとOJのそれぞれの語の第二音節*—moと—mo₁
の対応であるが、これは我々が確立した「規則1」の一例証であることを確認していただき
たい。次に、問題の第一音節であるが、PA*momoのそれが、かつては*mu—であった
としても、この母音調和によって、*mumo > *momoの変化経緯を辿ったであろう事は容
易に想像できる。もちろん、*momo > *momoであった可能性もある、しかし、(78)の語を

除いては非語末音節で OJ の Co_1 と PA の *Co が対応する例が一例も無いことを考えると、この母音調和が活動を始める前の語形が *momoであったことを証明するのはかなり困難である。

「規則 4」は、 Co_2 に関する場合、語内の位置に無関係に多数列によって証明される。[Table 02A]を参照されたい。例外は、[Table 02B]にわずか二例だけが認められる。(22) OJ mi_1no_2 :: PA *minjo と (171) OJ no_2 :: PA *no である。

「規則 4」は、Co については、語内の位置の制約を受けず、[Table 03A]にある様に、これも多数の例から抽出される規則である。例外は、一例、(220) OJ amori :: PA *amor のみである。

5. 音韻規則が示唆するもの

最後に、「規則 1」について一言所見を述べておきたい。この規則、OJ $—Co_1$:: PA * $—Co$ を例証する項目の数は決して多くはない。しかし、この対応が、OJ の Co_2 及び Co 音節が、PA の * $(C)oCo$ 型の語形に関わらない限りにおいては、ほとんど PA の *Cu 音節に対応している事実に対しては、かなり明瞭な境界線を持っていることは、我々にとっては大変重要な意味を持つ。例証が少なくても、対応型の異なりがここまではっきりしているなら、これを奈良朝日本語のオ段甲類乙類音節の書き分けに対する痕跡と見るのが妥当であるとしなければならぬ。先に見た 6 項目の反証例が気になるところである。紙面の都合上、別の機会を得て考証を行いたい。前述した通り、これらについては何等かの通時的根拠が見当たることが多い。例えば、(85) OJ majo₁ :: PA *maju の場合、『時代別国語大辞典』(上代編)によると、『神代紀』(上)や『和名抄』などには、「マユ」という語形が文証されている。当時、majo₁~maju のダブルレットが存在していた訳である。OJ の maju という語形であれば、PA での対応形式は、当然 *maju となって現れるはずである。

いずれにしても、我々が見たこの痕跡について、今後もっと多くの例証を得ることができれば理想的であることは言うまでもない。著者自身も含め、関係諸氏の努力に期する所が大きい。

注

1. “祖語” (proto-language) とは、現代諸方言 (或いは“姉妹語”) のデータから、“比較再建法”という手立てを用いて復元される、それら諸方言の論理上の“親言語” (mother language, parent language) の事をいう。
2. この項目数 261 の中には、再構不可能なもの (IRC) 及び方言データが不十分で再構を行わなかったもの (INV) も含まれている。
3. イ段音節のものについては、当紀要の 27 号に掲載を予定している。
4. 奈良時代の日本語とは、『万葉集』、『古事記』、『日本書紀』などのテキストなどに文証される日本語のこと。

とをいう。

5. 最初に、この書き分けの存在に気付いていたのは、石塚の師にあたる本居宣長である。
6. ローマ字表記の場合でも、最右端にア行音節、最左端にワ行のものと「ん」を配したものが有るが、本稿では後の〔表3〕との対比を意識して、意図的に左右の配列を反転してある。
7. 音節の「も」については、『古事記』にのみ、その書き分けが見られる。『万葉集』や『日本書紀』には書き分けが無く、それが他のオ段音節よりいち早く書き分けの区別を失ったものと見られている。諸文献からして、甲乙の書き分けは、語彙別、音節別に順次消失していったと思われる。いわゆる、lexical diffusion (語彙拡散) であろう。
8. しかし、これをプレ奈良期の母音体系からポスト奈良期のそれへの変遷の過度期のものとした場合、このような体系が一時的に生じたとしても不思議は無いかも知れない。プレ奈良期(推古期あたりか)は、文献も極端に少ないが、歴史言語学で言う“内的再建法”などによって、その頃の母音体系が、i(甲類の前身)、a、u、及びo(乙類の前身)の四つの母音を有していた可能性も唱えられている。それが、形態素境界線での母音連続、そして単母音化を経て、その後平安期の五母音体系へ移行していったものと考えられる。もしこの事が事実であったなら、奈良時代におけるこのような音節体系は短命であった事になり、その体系が不安定であった事を示している様な印象がある。一般的に安定した体系であると言われる五母音体系が、現代の日本語のほとんどの方言で、平安期以降千年以上も存続してきた事実と照らし合わせてみるとよい。
なお、“内的再建”による四母音体系の再建については、松本1975、1982や大野1978などに詳しい。
9. 両者の推定は、共通に母音表記部に照準を合わせているが、乙類の「い」と「え」の* [i] や* [ə] を一種のわたり音か、或いは子音表記部に含まれる子音音価の非口蓋的要素と解釈した場合、共に六母音体系の確立に通ずる。この考えは服部1983などに見られる。
10. 前者は、前章の橋本モデルに見られる。後者は、服部1976と1983によるものである。この [kje] であるが、服部論文によると、前舌母音の [i] や [e] などの直前に置かれる子音 [k] が、自然に口蓋化している様子を示したものである。従って、わたり音 (palatal glide) を介した [kje] などの音節とは区別して考える必要がある。
11. 上の10を参照のこと。
12. もう一度繰り返すが、古代日本語のものは、この段階ではあくまでも仮名をローマ字転写したものである。表題には、共に「音韻・・・」という用語を用いてあるが、これは便宜上のものであり、「音韻」には広義の解釈を持たせてある。
13. Urakami 1989を参照。

参 考 文 献

- 有坂秀世 1957.『国語音韻史の研究』 東京 三省堂
 伊波普猷 1974.「琉球語の母音組織と口蓋化の法則」『伊波普猷全集』第四巻 東京 平凡社
 大野 晋 1974.『日本語をさかのぼる』 東京 岩波書店
 ——— 1978.「動詞活用の起源」『日本語の文法を考える』 東京 岩波書店
 ——— 1982.『上代仮名遣の研究』東京 岩波書店
 橋本進吉 1950.『国語音韻の研究』 東京 岩波書店
 ——— 1976. (第一刷 1966) 『国語音韻史』(橋本進吉著作集第六冊) 東京 岩波書店

奈良朝日本語のオ列甲類乙類音節について

- 服部四郎 1976.「上代日本語の母音体系と母音調和」『言語』五卷六号 東京
大修館書店
- 1983.「橋本進吉先生の学恩。——『元朝秘史』音訳漢字の使用法に言及しつつ」
『国語学』133集
- 松本克己 1975.「古代日本語母音組織考 —— 内的再建の試み」『金沢大学文学部
論集 文学編』第22卷
- 1982.「言語史の再建と言語普遍」『言語研究』86号 東京 日本言語学会
- Bynon, Theodora 1977. *Historical Linguistics*. Cambridge. Cambridge Press.
- Urakami, Junnosuke 1989. Some problems in the phonology of Old Japanese reconsidered in the light of comparative evidenc from the Amami dialects. Ph.D dissertation. Unpublished. Department of Linguistics, School of Oriental and African Studies, University of London. London.
- 1992a. Reconstruction of the consonants of Proto-Amami. *The Annals of Gifu University for Education and Languages* No.23.
- 1992b. PROTO-AMAMI — Recostruction of its Vowels, Synchronic Description, and the Formulation of the Sound Changes— *The Annals of Gifu University for Education and Languages* No.24.

参考資料1：奄美祖語 (PA)：古代日本語語彙対応表

No.Gloss	PA	OJ	No.Gloss	PA	OJ
1 'capital'	INV	mi ₁ jako ₁	36 'pond'	*i__	ike ₂
2 'next door'	INV	to ₁ nari	37 'dream'	*imī	ime ₂
3 'Shinto prayer'	INV	no ₂ rito ₁	38 'surface'	IRC	upe ₁
4 'waste'	*kuſi	ko ₂ si	39 'plum tree'	INV	ume ₂
5 'steaming basket'	INV	ko ₂ siki	40 'shadow'	*kagē	kage ₂
6 'impurity'	nī_r_	nigo ₂ ri	41 'pot'	*kamī	kame ₂
7 'time'	*tuki	to ₂ ki ₁	42 'tortoise'	*kamī	kame ₂
8 'time, years'	*tuſi	to ₂ si	43 'rice'	*kumī	ko ₂ me ₂
9 'bird'	*turi	to ₂ ri	44 'J liquor'	*sēhē	sake ₂
10 'person'	*tſu	pi ₁ to ₂	45 'bamboo'	*dēhē	take ₂
11 'spirit of the dead'	*tſ__dama	pi ₁ to ₂ dama	46 'mountain'	*tēhē	take ₂
12 'husband'	*wutu	wopi ₁ to ₂	47 'sake'	INV	tame ₂
13 'one'	*t' īi	pi ₁ to ₂	48 'claw'	*tsimī	tume ₂
14 'one day'	*tſui	pi ₁ to ₂ pi ₁	49 'seedling'	IRC	nape ₂
15 'one year'	*tſutuſi	pi ₁ to ₂ to ₁ se	50 'cooking pot'	*nabē	nabe ₂
16 'three years'	*mitſ__	mi ₁ to ₂ se	51 'paint brush'	INV	pake ₂
17 'dance, jumping'	*wuduri	wodo ₂ ri	52 'fly'	INV	pape ₂
18 'paste'	*nuri	no ₂ ri	53 'beans'	*mamī	mame ₂
19 'laver'	*nuri	no ₂ ri	54 'serious'	INV	mame ₂
20 'yesterday'	*k ² inj_	ki ₁ no ₂ pu	55 'seaweed'	INV	wakame ₂
21 'white'	*ſirju	siro ₁	56 'pail'	*wuhē	woke ₂
22 'straw raincoat'	*minjo	mi ₁ no ₂	57 'hair'	*kī	ke ₂
23 'chisel'	*numi	no ₂ mi ₂	58 'container'	*kī	ke ₂
24 'waking'	IRC	oki ₂	59 'sign'	INV	ke ₂
25 'tree'	*kī	ki ₂	60 'smoke'	*kībuſi	ke ₂ buri
26 'fire'	INV	pi ₂	61 'food receptacle'	*P_	pe ₂
27 'fruit'	*mi	mi ₂	62 'eye'	*mī	me ₂
28 'grudge'	*urami	urami ₂	63 'bud'	*mī	me ₂
29 'god'	*kami	kami ₂	64 'beloved'	*mē—	me ₂ gusi
30 'moon'	*tsiki	tuki ₂	65 'circumference'	*mīguri	me ₂ guri
31 'reed'	*wugi	wogi ₂	66 'child'	*kkwa	ko ₁
32 'J cedar'	*sigi	sugi ₂	67 'short sword'	*kugatana	ko ₁ gatana
33 'clover'	INV	pagi ₂	68 'calf'	*kubura	komura
34 'winnowing'	*pir_	pi ₂	69 'cat'	INV	neko ₁
35 'darkness'	*jam	jami ₂	70 'public person'	*t_ne	to ₁ ne

奈良朝日本語のオ列甲類乙類音節について

No.Gloss	PA	OJ	No.Gloss	PA	OJ
71 'tiger'	*tura	to ₁ ra	107 'and'	*tu	to ₂
72 'trace'	*ato	ato ₁ (ato ₂)	108 'to fly'	*tub-	to ₂ bu
73 'bay'	*minjato	mi ₁ nato ₁	109 'tree top'	INV	to ₂ busa
74 'inn'	*jado	jado ₁	110 'far'	*tuu	to ₂ po
75 'door'	*jado	jado ₁	111 'pass by'	*tuuri	to ₂ pori
76 'gateway'	*kado	kado ₁	112 'to stop'	*tumi	to ₂ mu
77 'antler'	*tsino	tuno ₁	113 'fellow'	*tungara	to ₂ mo ₂ gara
78 'thigh'	*momo	mo ₁ mo ₁	114 'younger brother'	*ututu	oto ₂ pi ₁ to ₂
79 'bag, sack pouch'	*pukkur_	pukuro ₁	115 'to drop'	*utuʃ-	oto ₂ su
80 'hemp'	*so	so ₁	116 'sound'	*utu	oto ₂
81 'sky'	INV	so ₁ ra	117 'trunk'	*mutu	mo ₂ to ₂
82 'beach'	*iʃo	iso ₁	118 'stagnation'	*judumi	jo ₂ do ₂ ri
83 'weak'	*juwa—	jo ₁ wa	119 'plover'	INV	tido ₂ ri
84 'midnight'	*junaha	jo ₁ naka	120 'J cypress'	INV	pi ₁ no ₂ ki ₂
85 'cocoon'	*maju	majo ₁	121 'to ride'	*n_r-	no ₂ ru
86 'this-'	INV	ko ₂	122 'climbing'	*n_b_r-	no ₂ bori
87 'this year'	*kutuʃi	ko ₂ to ₂ si	123 'to drink'	*num-	no ₂ mu
88 'this-'	*kun	ko ₂ no ₂	124 'life'	*inj_tʃi	ino ₂ ti
89 'this world'	*kun.ju	ko ₂ no ₂ jo ₂	125 'to carry'	*mutʃ-	mo ₂ tu
90 'this'	*kuri	ko ₂ re	126 'thing'	*mun	mo ₂ no ₂
91 'to row'	*kug-	ko ₂ gu	127 'talking together'	*mungatar_	mo ₂ no ₂ gatari
92 'last year'	*kuzu	ko ₂ zo ₂	128 'wide'	*pirju	pi ₁ ro ₂
93 'speech'	INV	ko ₂ to ₂	129 'to lower'	*uru_	oro ₂ su
94 'thing'	INV	ko ₂ to ₂	130 'to dye'	*simi	so ₂ mu
95 'language'	*kutuba	ko ₂ to ₂ ba	131 'slow'	*oso	oso ₂
96 'bull'	*k_t_	ko ₂ to ₂ pi ₁ usi	132 'lifetime'	*ju	jo ₂
97 'liking'	*k_n_mi	ko ₂ no ₂ mi ₁	133 'to bring together'	*jus-	jo ₂ su
98 —	INV	—	134 'to approach'	*jur-	jo ₂ su
99 'congealing'	*-guri	ko ₂ ri	135 'to count'	*jum-	jo ₂ mu
100 'kill'	*kutʃ	ko ₂ ro ₂ su	136 'four'	*juutsi	jo ₁ tu
101 'voice'	*kui	ko ₂ we	137 'thick'	INV	ko ₁
102 'to become pleased'	*juruku_	jo ₂ ro ₂ ko ₂ bu	138 'powder flour'	*ku	ko ₁
103 'horizontal'	*j_k_	jo ₂ ko ₂	139 'small-'	INV	ko ₁
104 'to wake'	*h_ʃ_	oko ₂ su	140 'bamboo basket'	*-kku	ko ₁
105 'bed'	*tuku	to ₂ ko ₂	141 'to cross over'	*ku_	ko ₁ su
106 'vestige'	*naguri	nago ₂ ri			

No.Gloss	PA	OJ	No.Gloss	PA	OJ
142 'son-in-law'	*m_h_	muko~mo ₁ ko ₁	179 'internal organs'	*k' im_	ki ₁ mo ₁
143 'box'	*pakku	pako ₁	180 'wear'	*k' ir-	ki ₁ ru
144 'gate'	INV	to ₁	181 'chrysan- themum'	INV	kiku
145 'to endeav- our'	*tsit_m-	tuto ₁ mu	182 'autumn'	*akki	aki ₁
146 'housewife'	*tuži	to ₁ zi	183 'inside'	*ukki	oki ₁
147 'to grind'	*tug-	to ₂ gu	184 'barrier'	*sëkki	seki ₁
148 'black'	*k'uru	kuro ₁	185 'snow'	INV	juki ₁
149 'interesting'	*omojir_	omosiro ₁	186 'upper jaw'	*agi	agi ₁
150 'skirting'	*s_so	suso ₁	187 'nail'	*k' ugi	kugi ₁
151 'night'	INV	jo ₁	188 'braid'	INV	pi ₁ mo
152 'night'	*juru	jo ₁ ru	189 'to enshrine a god'	*j_ë	ipapi ₁
153 'day'	*piru	pi ₁ ru	190 'shellfish'	INV	kapi ₁
154 'recently'	INV	ko ₂ no ₂ ko ₂ ro ₂	191 'journey'	*tabi	tabi ₁
155 'mind'	*kokoro	ko ₂ ko ₂ ro ₂	192 'shining red'	*nj_	nipopi ₁
156 'answer'	INV	ko ₂ tape ₂	193 'J belt'	*ubi	obi ₁
157 'leaf'	*kïnpa	ko ₂ no ₂ pa	194 'J sake'	*mikki	mi ₁ ki ₁
158 'to shut in'	*g_m_r-	ko ₂ mo ₂ ru	195 'cape'	INV	mi ₁ saki ₁
159 'J harp'	INV	ko ₂ to ₂	196 'paper'	*kabi	kami
160 'to remain'	*nokor-	no ₂ ko ₂ ru	197 'hair'	INV	kami ₁
161 'to wipe'	*nuga-	no ₂ go ₂ pu	198 'tear'	*nada	nami ₁ da
162 'blame'	*tuga	to ₂ ga	199 'ear'	*mimi	mi ₁ mi ₁
163 'wharf'	*t_mar-	to ₂ mari	200 'bow'	*jumi	jumi ₁
164 'stern'	*tomo	to ₂ mo	201 'woman'	*wunagu	womi ₁ na
165 'place'	*tokoro	to ₂ ko ₂ ro ₂	202 'to cut'	*k' ir-	ki ₁ ru
166 'mam's place'	*tono	to ₂ no ₂	203 'bruise'	*k' izi	ki ₁ zu
167 'friend'	*tomo	to ₂ mo ₂	204 'today'	*kjuu	ke ₁ pu
168 'thief'	INV	nusubi ₁ to ₂	205 'turning over'	*këëji	kape ₁ si
169 'sleeve'	*tam_tu	tamoto ₂	206 'capsized'	INV	kape ₁ ri
170 'to lodge at'	INV	jado ₂ ru	207 'front'	*mëë	mape ₁
171 'field'	*no	no ₂	208 'royal servant'	INV	be ₁
172 'declare'	*nor-	no ₂ ru	209 'evening'	*jubë	jupube ₁
173 'stony land'	INV	so ₂ ne	210 'female'	*mëë	me ₁
174 'good'	INV	jo ₂ ka	211 'seeing, governing'	*mišo	me ₁ si
175 'gathering'	*j_r_	jo ₂ riapi	212 'suppression'	*_s_	osape ₂
176 'fog'	*k' iri	ki ₂ ri	213 'generally'	INV	opokata
177 'shore'	INV	ki ₂ si			
178 'nehpew'	*wui	wopi ₂			

奈良朝日本語のオ列甲類乙類音節について

No.Gloss	PA	OJ	No.Gloss	PA	OJ
214 'parent'	*uja	oja	250 'dark'	*kura	kura
215 'crying out'	*urab_	orabi ₁	251 'rice bran'	*nuka	nuka
216 'outside'	*puka	poka	252 'ancient times'	*muka _{ji}	mukasi
217 'temporary grave'	*m_ ja	moja	253 'village'	INV	mura
218 'governing'	INV	wosame ₂	254 'floor'	*juka	juka
219 'end'	INV	wo ₂ pari	255 'pillow'	*mak [?] _ ra	makura
220 'falling from heaven'	*amor_	amori	256 'spring'	INV	paru
221 'blue, green'	*oo	awo	257 'measure'	INV	masu
222 'face'	*kao	kapo	258 'sweat'	*asi	ase
223 'admiration'	*kam_	kamo	259 'wind'	*kaz_	kaze
224 'boat pole'	*so	sawo	260 'temple'	INV	tera
225 'ten days'	*tuuka	to ₂ woka	261 'wing'	*pan_	pane
226 'defense'	*maburi	mamori			
227 'growing older'	INV	oi			
228 'old man'	*ut _{ju}	oipi ₁ to ₂			
229 'fish hook'	INV	opodi			
230 'mother'	*amma	omo			
231 'sail'	*pu	po			
232 'star'	*pu _{ji}	posi			
233 'bone'	*puni	pone			
234 'duckweed'	*m_	mo			
235 'rice cake'	*mut _{ji}	moti			
236 'unhulled rice'	*mumi	momi ₁			
237 'wood'	*muri	mori			
238 'spider'	*k [?] ubu	kumo			
239 'tail'	*wu	wo			
240 'male'	*wu	wo			
241 'axe'	*wun	wono ₂			
242 'to exist'	*wu_	wori			
243 'fish'	*j [?] u	uwo			
244 'ten'	*tu	to ₂ wo			
245 'here'	*usagi	usagi ₁			
246 'singing'	*uta	utapi ₁			
247 'inside mind'	*ura	ura			
248 'eating'	*kur_	kurapi ₁			
249 'grass'	*k_ sa	kusa			